

出生コホート研究における追跡中断とその防止： HBC Study

著者	中原 竜治, 土屋 賢治, 浅野 良輔, 奥村 明美, 釘 寄 ゆめの, 鈴木 由紀子, 中安 智香子, 原田 妙子, 山下 真菜, 伊東 宏晃, 武井 教使
雑誌名	DOHaD研究
巻	4
号	1
ページ	80-80
発行年	2015
URL	http://hdl.handle.net/10271/2954

出生コホート研究における追跡中断とその防止 : HBC Study

中原竜治¹、土屋賢治¹、浅野良輔¹、奥村明美¹、釘寄ゆめの¹、鈴木由紀子¹、
中安智香子¹、原田妙子¹、山下真菜¹、伊東宏晃²、武井教使¹

1) 浜松医科大学子どもこころの発達研究センター、2) 浜松医科大学産婦人科学講座

【背景・目的】

ヒトの発生からその発達の予後を予測する試みにおいて、出生コホート研究は重要な役割を担っている。さて、出生コホート研究の長期追跡期間中に、一部の参加者が参加を辞退することにより追跡の中断が生ずる。追跡の中断は選択的に生ずることが常なので、追跡の中断はコホート研究データの質を低下させる。ここで、データの質の低下を事前に防ぐには 2 つのアプローチ、すなわち追跡の中断を参加者への働きかけを通じて直接的に防止すること、また、追跡中断が生じやすい参加者を特定することが必要である。本研究の目的は以下の 2 点である。①浜松母と子の出生コホート研究 (HBC Study) における追跡中断を防ぐためのデザインを検討し、その成果としての「中断率」を示す。②HBC Study における追跡中断者の属性を明らかにする。

【対象・方法】

HBC Study (妊婦 N=1138、新生児 N=1258) は、2007 年 11 月に運営が開始された病院ベースの出生コホート研究であり、出生後 8 年の予後の追跡が予定されている。その参加者は日本全国の妊婦および新生児を代表する属性を有している。運営開始前に立案された追跡方法の立案に際しては、英国の出生コホートを運営する Golding ら (2001) の手法、追跡方法について網羅的に検討を行った Lynn ら (2005) の手法を吟味・検討の上、取り入れた。

【結果】

①追跡中断を防ぐため、直接的な評価(face-to-face)を全面的に採用した。また、参加者へのインセンティブには金品を採用し、また種々のアドバイスや結果のフィードバックを積極的に行った。その結果、中断者は 2 年間で 87 名 (8%) にとどまり、先行する世界の出生コホート研究と同等あるいはそれ以下の数値が得られた。

②追跡中断に至った 87 名 (中断群) と 2 年間追跡を継続できた児 1065 名 (追跡群、里帰り分娩によってうまれた児を除く) を比較したところ、中断の決定因として、母親の 16 年超の教育歴 (OR=7.9)、浜松市外の居住 (OR=5.4)、母親の 12 年未満の教育歴 (OR=4.5) が得られた。

【結論】

HBC Study で採用した追跡中断を防ぐための工夫は、有効であった。出生コホートのキャッチメントエリアに配慮がなされていれば、中断率をさらに下げることが可能であったと考えられる。

抄録本文の文字数 : 976 文字